

シュンギク キク科 原産地：地中海沿岸 学名：Chrysanthemum coronarium L.
ハウス栽培（冬春穫り）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作 型												
主な作業	播 種 定 植 収 穫 内 張 り											

技 術 体 系

2～3作を目安とする。

1 作型の特徴

夏から初秋の炭疽病回避を除けば、品質・収量向上に最もハウス栽培の効果が得られる作型であり、保温能力の点でもトンネル栽培より生育期間の短縮が期待できる。しかし、低温年に備えた二重カーテン（または二重トンネル）がなければ、シュンギクは発芽しないし発芽しても寒害の危険が伴うことに注意する。

2 適応地域

全域

3 栽培条件

（1）温度

一定の耐暑性・耐寒性を有するが、27～28℃を超えると生育は阻害される。また、本葉が展開していれば0℃以下でも枯死せず越冬可能であるが、発芽から本葉展開期までは寒害を受けやすい。従って、経済栽培を行うためには、発芽を含めた生育適温10～25℃を維持できるよう管理を行う。

（2）光

生育には強光を必要としないが、種子は好光性種子であるため光が当たる方が発芽率は向上する（→播種時の覆土は薄くする）。

（3）土 壌

適応性は広いが、乾燥に弱いので地下水位が高いところが適する。同時に排水性のよいことも要求されるため、栽培に際しては有機物の投入が必須である。また、忌地性があるため、同一圃場での連作は

4 施設装備

単棟ハウス＋二重被覆

5 経営目標

（1）収 量	3 t/10a
（2）投下労働時間	400時間/10a
（3）所 得 率	75%
（4）経営規模	20a

（家族労働力2人の場合）

栽 培 技 術

1 品種と特性

「きわめ中葉春菊」

中葉系の摘みとり種。低温伸長性と側枝の発生力が強く、葉は濃緑で柔らかく、香りがよい。

「さとゆたか」

中葉系の摘みとり種。節間がつまり、葉形のそろいも良く、側枝の発生も良い。また、べと病に強く、高温期にも安心して栽培できる。

2 育苗

10 a 当たり100㎡の育苗床が必要である。完熟堆肥200kgにと併せ、窒素・リン酸・カリを成分1.5kg施肥し、条間10～15cmで条まきする。その後、本葉2～2.5枚の時に間引きを行い、株間3～4cmに調整する。

3 圃場準備

(1) 土づくり

定植2週間前までに10a当たり完熟堆肥2tを投入し耕耘しておく。また、pHは定植時5.5～6.0となるよう調整する（高くなりすぎないように注意する）。

(2) 施肥

基準となる施肥量は以下のとおりであるが、ECが高いと生育に影響を及ぼすので、事前に土壌分析を行い必要に応じて減肥する。

(Kg/10a)			
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
基肥	14.0	14.0	14.0
追肥	6.0	—	6.0
合計	20.0	14.0	20.0

4 定植

(1) 苗

播種後30日前後、本葉4～5枚の苗が定植適期となる。定植の際、異株・奇形葉は必ず取り除く。

(2) 栽植様式

畦幅120（6条植）～150（7条植）cm、条間20cm、株間15～18cmを目安に定植する。

(3) マルチ

生育促進と抑草効果が得られる。マルチングは黒マルチで行う。

(4) その他

定植後は必ず灌水を行うとともに温度確保に努め、活着を促進する。

5 管理

(1) 温度

日中20～25℃、夜間最低温度5℃を下限に管理する。二重被覆は気温が最低気温が10℃を下回る11月中旬を目処に準備し保温に努める。

(2) 灌水

晴天日の午前中に行い、乾燥させないように注意する。

(3) 追肥

葉色をみながら適宜行っていくが、一般的には

収穫後液肥で施す。1回当たりの施肥量は窒素成分量0.5～1.0kg/10aの範囲に止める。

6 収穫

主茎が30cm程度に達した時、本葉4～5枚を残して収穫（摘心）する、その後は25cmに伸びた頃、葉を2枚残して順次収穫していく。収穫時には1株に2～3本の側枝を残し草勢を維持する。